

望月昭秀さん

（『縄文ZINE』編集長）

縄文時代は結末のないミステリー小説

紀元前一万年前から約一万年続いたといわれる縄文時代。そこに焦点を当てた雑誌が『縄文ZINE』だ。同誌編集長の望月昭秀さんに、尽きることない縄文の魅力について聞いた。

——『縄文ZINE』は、『縄文人』による映画紹介やインタビュー、マンガ、縄文時代に弱い人のための質疑応答などで構成されています。しかも三十数ページもあるのに無料。創刊のいきさつを教えてください。

僕は考古学者でも研究者でもなく、グラフィックデザイナーなのですが、昔から遺跡や歴史が好きでした。司馬遼太郎の時代小説も、星野道夫さんのアラスカインディアンについて書かれた本など、楽しく読んでいました。

それがここ七、八年ほど、休みのたびにあちこちの遺跡を巡るようになり、東京から気軽に行ける長野や

山梨あたりは、とくに縄文時代の遺跡が多いことがわかってきた。だんだんと縄文の魅力にハマっていったわけです。そして気づきました。遺跡に足を運んでいるのは、僕のような「縄文おじさん」か、散歩に来る近所のお年寄りぐらい。このままではいかん！ こんなに面白いのにファンがこんなに高齢化していたら、いつか誰も遺跡に訪れなくなるのではないだろうか、と。

縄文時代は文字がない時代なので、わかっていないことが多い。しかし逆にそのぶん、推測したり、想像力を駆使できる範囲も大きいのですが。それならいつ

そ考古学者ではない僕を感じる縄文の面白さや奥深さを伝える雑誌を作ってしまえと思ったわけです。

それまでは、縄文をテーマにした本といえば、子供向けの本や研究者による概説書しかなく、正直なところ自分で読んで楽しいものではなかった。縄文はもっとメジャーなエンタメになりうる要素が数多くあるのにもかかわらず、メディアがなかった。その空白を埋めようというのが『縄文ZINE』であり、二冊の単

縄文時代への入り口

——つい笑ってしまう記事も多いですね。

『縄文ZINE』は、一人でも多くの人に興味を持ってもらうためのツールとして、お勉強色をなくし、とにかく変な企画を多めにしました。最初から懇切丁寧な縄文のガイド本を作る気はありませんでした。お勉強色が強いものは、僕自身興味がなかった。

『縄文ZINE』の狙ったファン層は、二十代から三十代です（そもそもそんなファン層はいなかったのですが）。古代の歴史に興味のない人でも、好奇心の旺盛な人に面白そうだと思ってもらいたい。そのためにもおしゃれな装丁も必要になってくる。

記事は僕が面白いと思うことだけです。現代のカルチャーと対比するような形で縄文について語る。いきおい縄文の次にくる弥生時代については悪口になります。たとえるなら、上司や先輩の悪口を言っているひょうきんな友達のような感覚でつきあってもらえたらなあと考えていました。



●もちつき・あきひで 1972年静岡県生まれ。株式会社ニルソンデザイン事務所代表。フリーペーパー『縄文ZINE』編集長。著書に『縄文人に相談だ』（国書刊行会）、『縄文力で生き残り 縄文意識高い系ビジネスパーソンの華麗なる狩猟採集的仕事術100』（創元社）。『縄文ZINE』配布場所などはこちらから <http://jomonzine.com>